

## OSCE（客観的臨床能力試験）を用いた 介護技術教育の課題

### Evaluation about the Issues of Care Giving Skills by OSCE

村田マサミ・長尾哲朗・齋藤佳代子  
Murata masami, Nagao tetsurou, Saitou kayoko

#### 要 旨

本稿は介護技術の実技修得度を評価する手段にOSCE（客観的臨床能力試験）を導入して得られた成果と、今後の実技教育の方向性を明らかにしたものである。

OSCEを導入して、今後の実技教育を示唆する次の3点が得られた。①講義のみによる技術の説明では実技習得効果は低く実技演習を必要とする。②実技を習得するには時間を要し回数を重ねる必要がある。③到達レベルに達していない学生の把握ができ指導の方向性が検討できる。

なお、OSCEは学生・教師の両者にとって介護技術取得度を把握する上において有効な評価法であり、今後2年課程の限られた時間の中で、効果的に技術習得度を高められるよう運用方法を検討していきたい。

**Key Words** : OSCE 実技 補習授業

### はじめに

介護福祉士の教育において、介護技術（以下、技術という）は中心的存在であることは言うまでもない。竹尾は<sup>1)</sup>「技術教育は単に技術を教えるだけではない」と看護技術教育について述べている。その考え方は介護福祉士の技術教育においても同様であり、そこには知識・技術・態度が統合したものが求められる。利用者に対しては尊重した態度で接し、理論に裏付けされた確かな技術を提供できる人材を育てる必要がある。

当校の技術の時間数は国で規定されている60時間で、1年次の前期と後期に週2回（各期30時間・2単位）の授業を配置しているが、我々が目指す技術教育には、常々、実技演習（以下、実技という）の時間が足りないというジレンマを感じていたところ、平成17年度から技術の授業を担当する教員（以下、担当教員という）が2人から3人になったのを機に、指導が行き渡るよう学生数を半数にして、実技習得度を高めるため、授業の入っていない5講時に週1回（教員は2回になる）、担当教員3人で補習授業（以下、補習という）を開始した。

平成17年度の補習内容は、担当教員が独自で計画しており、それぞれの実技に繋がりを欠いたことを反省材料に、今年度は実技に連動性をもたせるよう担当教員間で補習内容を統一し実施した。

平成17年度までの評価は、もっぱら筆記試験を重視していたが、今年度より実技習得度を把握するための評価も兼ねあわせた。その評価方法としてOSCEを導入した。ここではOSCEを実施して得られた実技教育の成果を基に、今後の実技教育への示唆を得たので報告する。

## I. 用語と授業形態の説明

補習授業：介護の実技習得向上を目標に、カリキュラム上の「介護技術」の授業以外に設定した、実技の追加授業のこと。

実技演習：介護方法を実際に学生同士で体験すること。

授業形態：介護技術の授業は講義と演習で進めているが、比率的には講義が2/3以上を占めている。理論に裏付けされた実技を教えるには、現状の講義の時間数は必要である。

## II. OSCEとは

客観的臨床能力試験(Objective Structured Clinical Examination ; OSCE)<sup>2)</sup>は1975年英国のHardenらによって開発されて以来、臨床能力を客観的に評価する方法として欧州各地・北米のみならず世界的に用いられるようになった。日本には1994年初めて紹介され、医学教育に急速に普及し、近年、看護師教育に導入されつつある。

### 1. OSCE（客観的臨床能力試験）の方法<sup>2)</sup>

#### 1) Stationの配置

OSCEではいくつかの部屋（Station.）が用意され、それぞれの部屋で課題が出される。受験者は順に回って課題に取り組む。

2) 課題は基本的臨床技能の課題から、症例課題まで可能である。

3) 時間はHardenらのオリジナルは5分間であったが、その後、いろいろな長さが試みられ、最もよく使われているのは5～20分である。

4) 評価目的は形成評価にも、総合評価にも、用いることができる。

5) 評価者の数は1 Station, 1人で十分。むしろStationの数を増やす方が評価の信頼性が高まる。

### Ⅲ. 補習授業の内容（表１・２）

前期は４月から７月まで（以後この期間を前期という）、後期は１０月から１１月の試験日まで（以後この期間を後期という）の補習授業の日程と内容を表１、２に示す。補習授業はクラス４１名を、Ａ班（２０名）、Ｂ班（２１名）に分け、月曜日と木曜日の５講時に実技練習として指導した。

実習室のベッド（１０台）に同性ペアで、課題にそって介護者役と利用者役になり実技の練習をし、教員のチェックを受ける形式で行った。

始めに、教員がその日の内容の実技のデモンストレーションを行い、その後学生が練習し、それを最終的に担当教員が確認、指導するという流れで行なった。

練習ペアは慣れ合いを避けるために毎回異なるように配慮した。講義内容に沿って実技内容を組み合わせた。

表１ 前期補習授業

実施日		内 容
4/13	17	ベッドメイキング
4/20	24	ベッドメイキング
4/27	5/ 8	ベッドメイキング
5/11	15	食事介助
5/18	22	バイタルチェック
5/25	29	衣服の着脱
6/ 1	5	杖歩行介助
6/ 8	12	車椅子介助
6/15	19	排泄介助（ポータブルトイレ）
6/22	26	排泄介助（オムツ交換）

表２ 後期補習授業

実施日		内 容
10/12	16	体位変換（仰臥位～側臥位）
10/19	23	体位変換（仰臥位～端座位）自立
10/26	30	体位変換（仰臥位～端座位）介助
11/ 2	6	移乗介助（端座位～車椅子）
11/ 9	13	移乗介助（端座位～車椅子）

#### Ⅳ. 研究方法

1. 対象：介護福祉学科 1 年生 前期・後期とも 41 名  
ただし前期は学籍番号 1 ～ 41・後期は学籍番号 1 ～ 42（11 が不参加）
2. 期間：前期 平成 18 年 6 月 29 日， 7 月 3 日， 7 月 6 日， 7 月 10 日 5 講時  
後期 平成 18 年 11 月 20 日， 11 月 27 日， 11 月 30 日の 5 講時
3. 方法
  - 1) 本来の運用は課題別に複数の Station を設定するのだが、介護場面のつながりに重点を置き、OSCE の変形運用で、3 Station ・ 1 課題とした。
  - 2) 課題は第 1 段階実習（12 月）に焦点を当て、必要な実技を選択し、前期・後期で学習した実技が実施できるよう、日常生活の場面を設定した。
  - 3) 1 つの課題に 3 人の 担当教員が関わるので、評価の信頼性を保持するため評価基準を設け確認した。（表 3 ・ 4）

表3 前期の課題と評価基準

評価基準：全部できたら1点、1つのみであれば0.5点、できない場合は0点とする  
(6・12番に関しては評価基準を1つとする)

番号	課題	評価基準
1	利用者にしっかりと、散歩に出掛けることを伝え了解を得る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・閉じられた質問をし、了解を得る。</li> <li>・目線を合わせゆっくり丁寧に質問する。</li> </ul>
2	体調と気分の確認する声かけをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・閉じられた質問をし、確認する。</li> <li>・目線を合わせゆっくり丁寧に質問する。</li> </ul>
3	体温計で体温を適切な位置・角度で測る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体温を測ることを伝え、体温計の先端が腋窩に45度の角度で挟める。</li> <li>・データを正しく判断する。</li> </ul>
4	血圧計を適切に使用する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・血圧を測ることを伝え、マンシエットを適切な位置に適切に巻く。</li> <li>・データを正しく判断する。</li> </ul>
5	上着の脱着介助の際、「脱健着患」の原則にしたがって行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「脱健着患」の原則で、麻痺側の安全確保をしながら行う。</li> <li>・着替えた衣服を整え、着心地を確認する。</li> </ul>
6	室温が適切かどうか利用者に確認する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・室温を確認する。</li> </ul>
7	ポータブルトイレでの排泄介助で立ち上がりの際、適切な介助を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・立ち上がりの一連の動作指示をする。</li> <li>・立ち上がりの際、介護者は利用者にふらつき・めまいの確認し、麻痺側に位置する。</li> </ul>
8	排泄の際、プライバシーの保護をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・下衣と下着を下ろした際、素早くバスタオルで下半身を覆う。</li> <li>・安全を確認して、暫くその場を離れる。</li> </ul>
9	排泄終了後、利用者の手拭を適切に行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・排泄後、おしぼりタオルを手渡す。</li> <li>・利用者の健側の手で麻痺側の手を拭いてもらい、健側の手は介護者が利用者のおしぼりタオルの面を変えて拭く。</li> </ul>
10	杖の高さを適切に合わせ器具の安全を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・杖のグリップの高さを利用者の尺骨・大転子の高さに合わせる。</li> <li>・杖を持った側の足の外側15cm、前15cmの杖の位置で肘関節の内側が150°になるよう調節する。</li> </ul>
11	歩行中の段差で利用者に適切な指示をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3点歩行の順を適切に指示する。</li> <li>・車椅子での段差昇降を適切に行う。</li> </ul>
12	車椅子の点検を的確に行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・点検箇所3箇所の点検をする。</li> <li>①ブレーキの効き具合。</li> <li>②タイヤの空気圧が適当か。</li> <li>③フットレストの高さと位置が適当か。</li> </ul>
13	歩行中、介護者は適切な位置に着いて安全を確保する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・杖歩行中、麻痺側後方に位置し、気分の確認をする。</li> <li>・車椅子介助の際、利用者の両手がアームレストの中に入れておくよう指示する。</li> </ul>
14	利用者がリハビリに対して前向きになれるような言葉かけをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者が頑張ったことを共感する言葉かけを行う。</li> <li>・今後もリハビリに前向きに取り組めるようなはたらきかけをする。</li> </ul>
15	常に利用者が安心できそうな表情で接する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・常に命令的なはたらきかけをしない。</li> <li>・常に利用者の意思を尊重し、安心できる表情で接する。</li> </ul>

表4 後期の課題と評価基準

評価基準：全部できたら1点、1つのみであれば0.5点、できない場合は0点とする。

(4・12番に関しては評価基準を1つとする)

番号	課題	評価基準
1	ベッドから起き上がってもらう前にこれから何をするのか説明し了解を得る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>目線を合わせ、ゆっくり丁寧に話かけ、了解を得る。</li> <li>自己の意思を尊重する。</li> </ul>
2	ベッドから起き上がってもらう前に気分、健康状態の確認をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>目線を合わせ、ゆっくり丁寧に話かける。</li> <li>健康状態を確認する。</li> </ul>
3	ベッドから起き上がってもらう前に排泄の確認をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>目線を合わせ、ゆっくり丁寧に話かける。</li> <li>排泄の有無を確認する。</li> </ul>
4	車椅子の点検を適切に行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>点検箇所3箇所の点検をする。 <ul style="list-style-type: none"> <li>①ブレーキの効き具合。</li> <li>②タイヤの空気圧が適当か。</li> <li>③フットレストの高さと位置が適当か。</li> </ul> </li> </ul>
5	起居動作の指示・介助を適切に行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>利用者の体をコンパクトにまとめ、右側（健側）臥位にする。</li> <li>右手をしっかりとベッドに着かせ、起き上がりの指示を適切にする（自立支援）。</li> </ul>
6	起き上がった時と立ち上がった時にめまいの有無を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>起き上がった時、めまいの有無を確認する言葉かけをする。</li> <li>立ち上がった時、めまいの有無を確認する言葉かけをする。</li> </ul>
7	端座位にした時、安定した姿勢をとらせる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>体をベッドより少し送り出してもらい、両足底をしっかりと床に着ける。</li> <li>両足を肩幅にし、左足先（麻痺側）をやや外側に向ける。</li> </ul>
8	適切に車椅子を着ける。	<ul style="list-style-type: none"> <li>利用者の右側（健側）に20～45°の角度で着ける。</li> <li>車椅子のブレーキを掛け、フットレストを上げる。</li> </ul>
9	ベッドから車椅子へのトランスファー介助を適切に行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>介助者は利用者の右側（麻痺側）に着く。</li> <li>トランスファーの一連の流れを適切に行う。</li> </ul>
10	食堂へ行く時、介助者は適切な位置に着き、声かけを行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>車椅子の左側（麻痺側）に着く。</li> <li>適宜、疲労感を確認する声掛けをする。</li> </ul>
11	食事介助の際、食事環境を適切に整える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>食卓の高さが適切かどうか確認する。</li> <li>食卓と利用者との距離が適切かどうか確認する。</li> </ul>
12	食事介助の際、介助者は適切な位置に着き介助する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>左側（麻痺側）に座る。</li> </ul>
13	食事介助の際、水分に適切にトロミを付ける。	<ul style="list-style-type: none"> <li>水分を掬った時、ゆっくりと流れ落ちる程度にむらなくトロミを付ける。</li> <li>利用者の目の前で行わない。</li> </ul>
14	食事介助の際、まず水分から口にしてもらう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>水分（お茶）から口にすることを説明し、口腔内の健側（右側）に落とす。</li> <li>水分（お茶）を口にした時、むせなどが無いか確認する。</li> </ul>
15	食事介助の際、食物を適切な量を口腔内の適切な位置に落とす。	<ul style="list-style-type: none"> <li>口腔内の健側（右側）に落とす。</li> <li>食物をスプーンの1/2～2/3位の量にする。</li> </ul>
16	食事介助の際、スプーンは適切な使い方をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>スプーンを引き出す際、真っ直ぐ引き出す。</li> <li>スプーンが利用者の歯に当たらないようにする。</li> </ul>
17	食事介助の際、介助のスピードと誤嚥に配慮する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>利用者のペースで食事介助する。</li> <li>利用者がしっかりと嚥下したことを確認しながら介助する。</li> </ul>
18	食事介助の際、適切な声かけを行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>利用者の食事ペースに合わせてタイミングよく声掛けする。</li> <li>利用者の嗜好を確認するような声掛けをする。</li> </ul>
19	ベッドを整えに行くことの了解を得て、その場を離れる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>目線を合わす。</li> <li>ゆっくりとベッドを整えに行くことを説明し了解を得て離れる。</li> </ul>
20	適切にシーツを整える。（今回は頭側・足側共に三角折りとする）	<ul style="list-style-type: none"> <li>適切な手順で三角折りにする。</li> <li>シーツにしわを作らない。</li> </ul>

## 4) OSCEの手順

- (1) 学生同性ペアで実施。交互に介護者、利用者の役割をする。
- (2) 試験10日前に、日時、ペアの割り振り、課題を知らせる。(表5・6)

表5 前期演習課題

<p>Aさん、85歳は2年前脳梗塞を患い現在右片麻痺状態でリハビリ目的で介護老人保健施設に入所中です。言語障がい(「ハイ」、「イエ」でしか応えられません)があります。合併症として高血圧症があります。歩行はいつもT字杖で行っています。Aさんは昨日まで少し風邪気味で微熱がありましたが、今朝は大丈夫な様です。本日、気分転換とリハビリを兼ねて散歩に出かけることとなりました。朝食時に味噌汁をこぼしてしまい上着の裾を少し汚してしまいました。</p> <p>あなたは本日、Aさんのケア担当になりました。今、Aさんは居室のベッドで端座位で座っています。Aさんの健康状態を確認し、上着を着替えポータブルトイレでトイレを済ませて散歩(玄関までは3点歩行で、玄関からは車椅子で)に出かける介護をして下さい。</p>	
課 題	
1、	利用者にしっかりと「散歩に出かけること」を伝え了解を得る。
2、	体調と気分を確認する声かけを行う。
3、	体温計で熱を適切な位置・角度で測る。
4、	血圧計を適切に使用する。
5、	上着の脱着介助の際、「脱健着患」の原則に従って行う。
6、	室温が適切かどうか利用者に確認する。
7、	ポータブルトイレでの排泄介助で立ち上がる際、適切な介助を行う。 (利用者の足底の位置が的確で健側を引きおじぎをする動作をとらせる)
8、	排泄の際、プライバシーの保護をする。
9、	排泄終了後、利用者の手拭を適切に行う。
10、	杖の高さを適切に合わせ器具の安全を確認する。
11、	歩行中の段差で利用者に適切な指示をする。 (段差を降りる際、登る際、適切な繰り出し順を指示する)
12、	車椅子の点検を的確に行う。 (ブレーキの確認・タイヤの空気圧・フットレストの位置及び高さ)
13、	歩行中、介護者は適切な位置に付いて安全を確保する。
14、	利用者がリハビリに対して前向きになれるような言葉がけをする。
15、	常に利用者が安心できるような表情で接する。



表6 後期演習課題

<p>Bさんは、半年ほど前に自宅で2回目の右脳梗塞発作を起こし現在急性期を乗り越え、在宅復帰を目指して老人保健施設に入所中です。しかし、後遺症として左麻痺があり、まだリハビリが十分進んでおらず移動は一部介助（但し起き上がりは自分でできます）で、食事は全介助です。（食事形態は水分にはトロミが必要で主食は全粥食です）また、言語障がいはありません。</p> <p>あなたは本日、Bさんのケア担当になりました。いまBさんはベッドで仰臥位で居ます。Bさんをベッドから起こし車椅子に移乗してもらい、食堂まで一緒に行き食事介助をし、食事介助が終わったらBさんに断ってベッドのシーツを整えに行く介護をして下さい。</p>	
課 題	
1、	ベッドから起き上がってもらう前にこれから何をするか説明し了解を得る。
2、	ベッドから起き上がってもらう前に気分、健康状態の確認をする。
3、	ベッドから起き上がってもらう前に排泄の確認をする。
4、	車椅子の点検を適切に行う。
5、	起居動作の指示・介助を適切に行う。
6、	起き上がった時、立ち上がった時にめまいの有無を確認する。
7、	端座位にした時、安定した姿勢をとらせる。
8、	適切に車椅子を着ける。
9、	ベッドから車椅子へのトランスファーを適切に行う。
10、	食堂へ行く時、介護者は適切な位置に着き、声かけを行う。
11、	食事介助の際、食事環境を適切に整える。
12、	食事介助の際、介護者は適切な位置に着き介助する。
13、	食事介助の際、水分に適切にトロミを付ける。
14、	食事介助の際、まず水分から口にしてもらう。
15、	食事介助の際、食物を適切な量を口腔内の適切な位置に落とす。
16、	食事介助の際、スプーンは適切な使い方をする。
17、	食事介助の際、介助のスピードと誤嚥に配慮する。
18、	食事介助の際、適切な声かけを行う。
19、	ベッドを整えに行くことの了解を得て、その場を離れる。
20、	適切にシーツを整える。（今回は頭側・足側共に三角折りとする）

(3) 試験会場は介護実習室を、パテーションで区切りStationを作る。

(図1・2)

- ① 各担当教員より指示があれば、1組のペアが入室し、試験手順の説明を受ける。
- ② 物品の準備後、開始する。
- ③ 両者終了後、担当教員より指導を受ける。
- ④ 試験時間は制限しない。

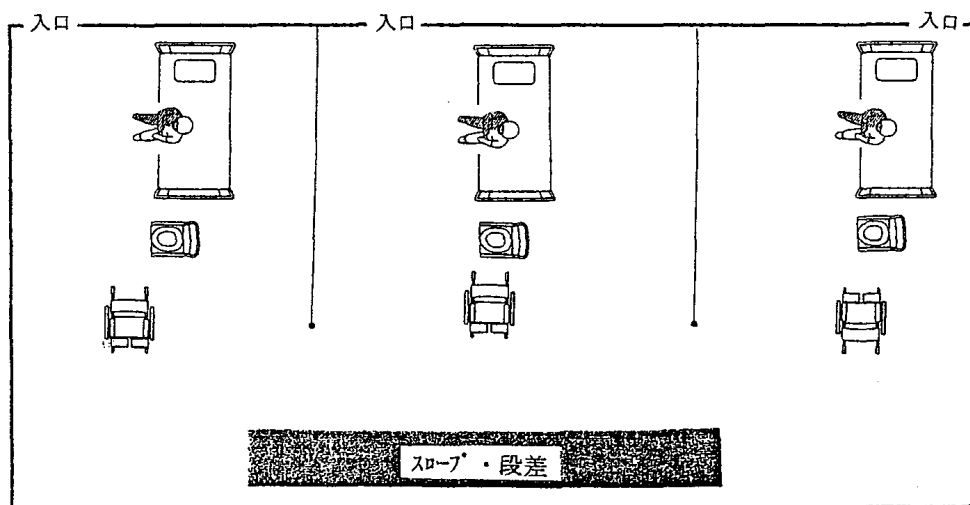


図1 前期試験会場

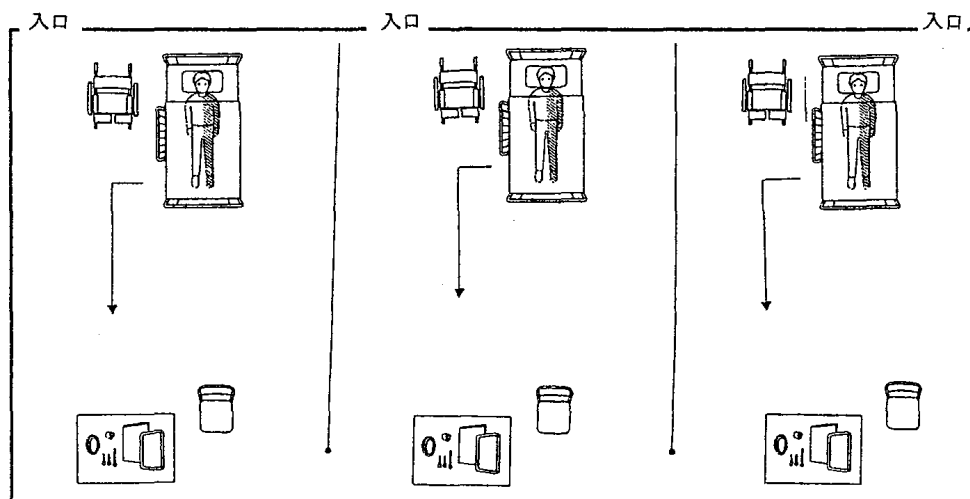


図2 後期試験会場 (介護技術講習指導マニュアルより引用・一部加筆 P85～92)

#### 4. 倫理的配慮

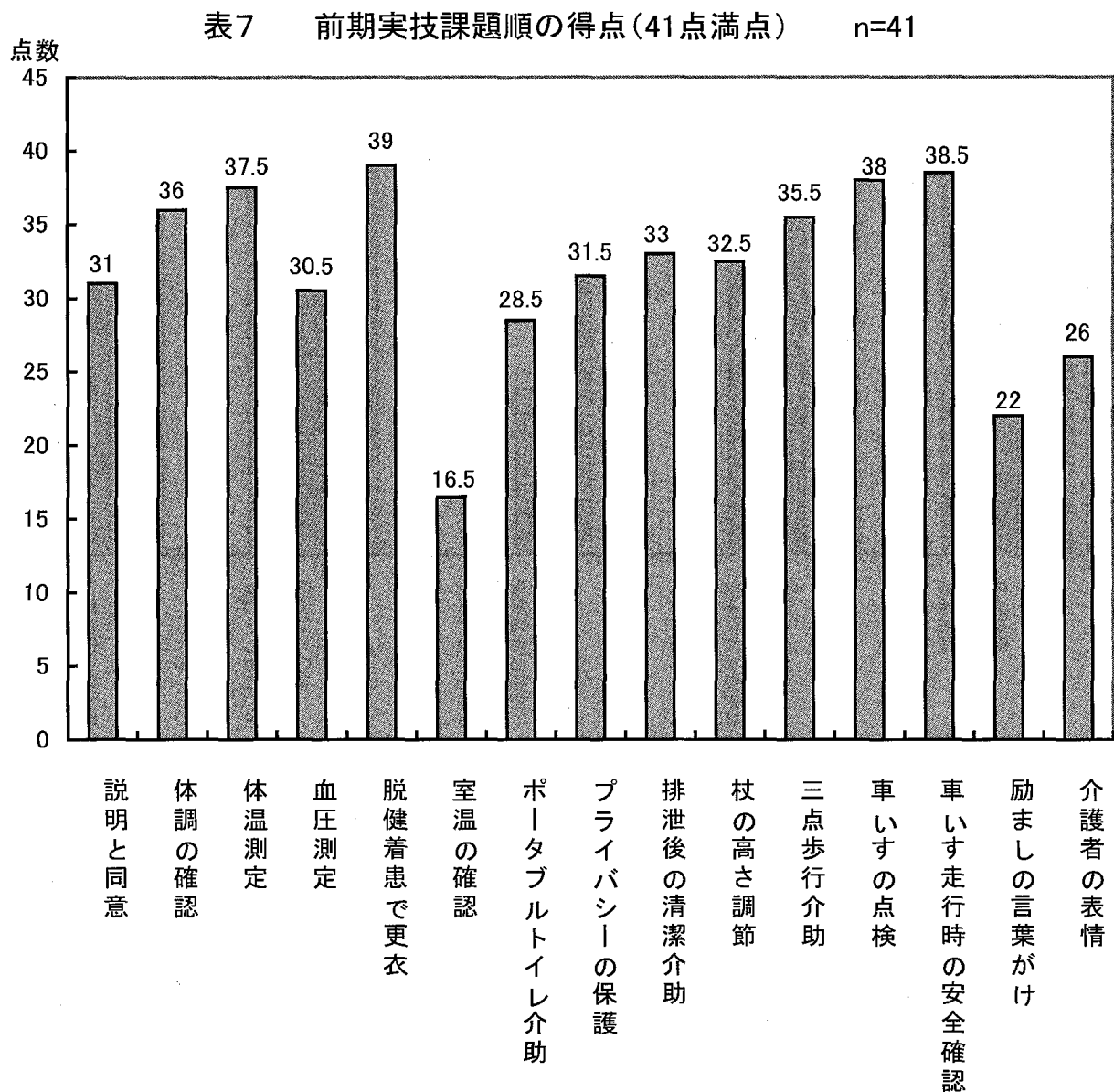
研究対象者には、実技試験の結果は研究としてまとめ、公表されるが、個人が特定されることはないことを口頭で説明を行い同意を得た。

### V. 結 果

#### 1. 課題別評価について

##### 1) 前期課題別得点（表7）

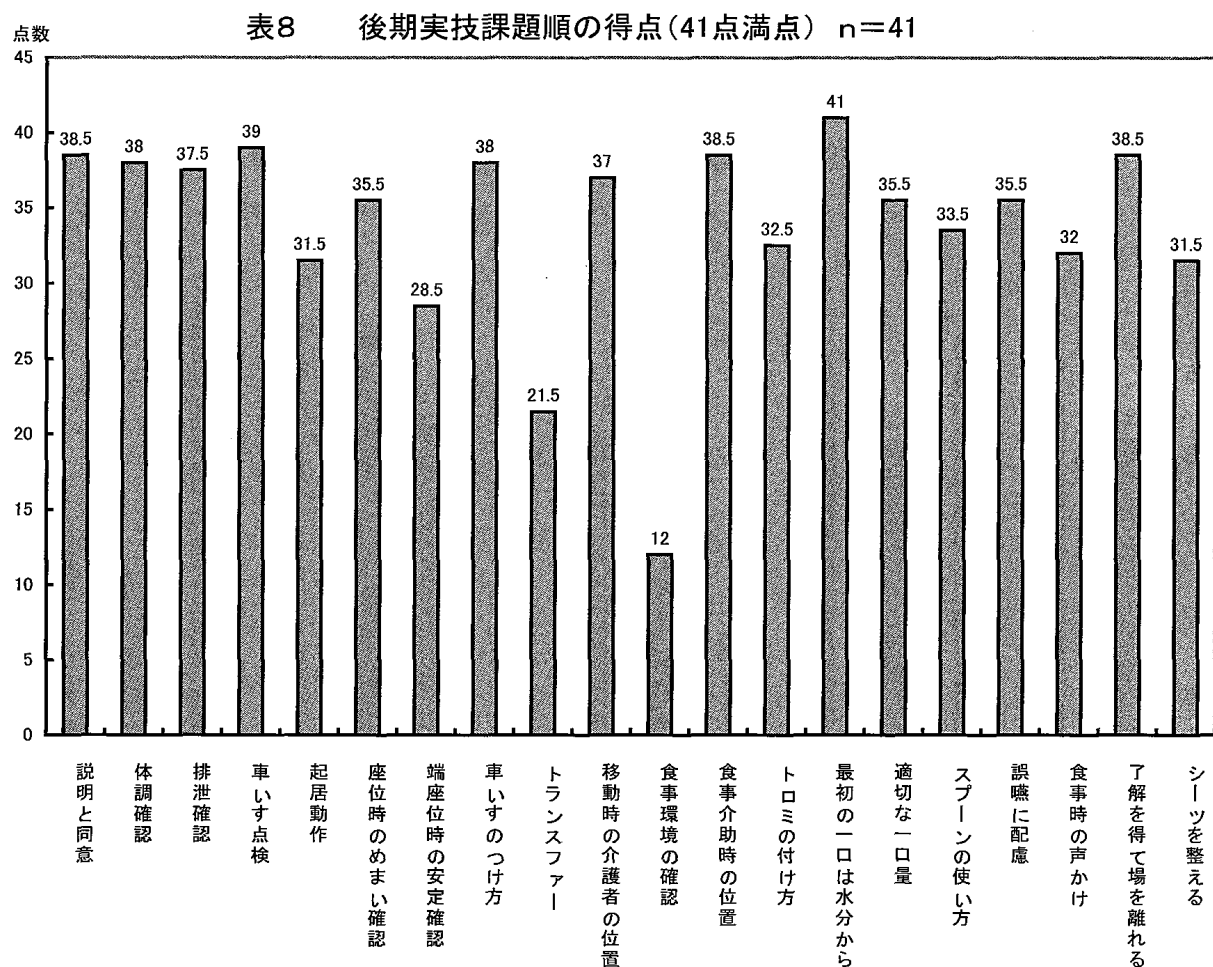
「室温の確認」が一番低く、次に「励ましの言葉がけ」、「介護者の表情」である。これらは、個人の感性も多分に影響すると思われるが、過度の緊張のため、言葉がけをなど、細かい配慮を欠いていた。



## 2) 後期課題別得点 (表8)

「食事環境（食卓の高さ、適切な姿勢など）の確認」は講義でプリント配布して、時間をかけて説明したが、実技をしていないため極端に低値となったと思われる。「トランスファー」は相手の危険を予測しながら適切な効率のよい動作を指示しなければならないものであるといった複雑な技術を要するものであり、再度、実技に盛り込む必要がある。

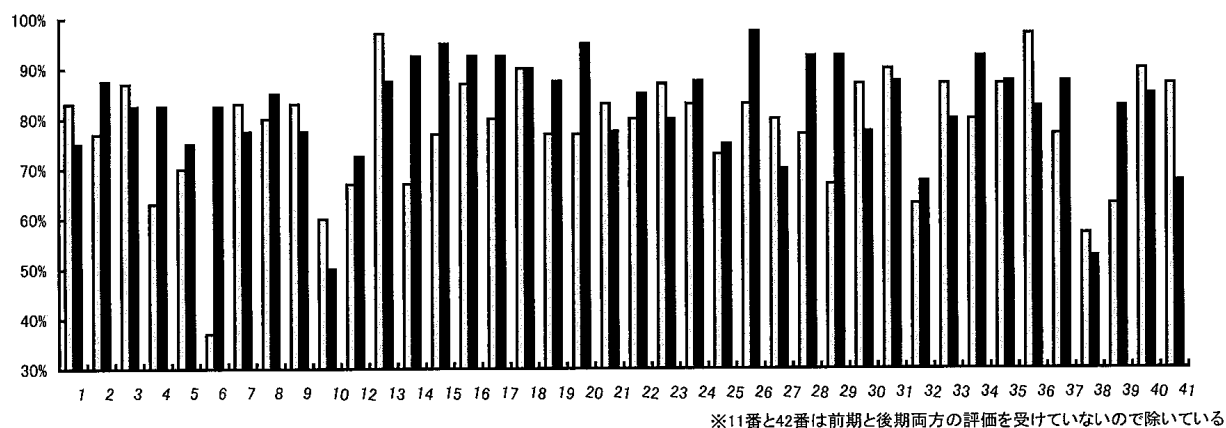
「説明と同意」、「体調確認」、「車いす点検」は2度目であり、前期より点数が上がっている。



## 2. 前期と後期の得点比 (表9)

前期、後期の実技課題数が違うので得点をパーセント替えて比較した。半数以上が後期に点数を伸ばしており、中でも6番は著しく伸びている反面、低調な学生もいる。それらの学生の技術を向上させるには個別指導が必要である。

表9 個人別前期・後期得点の比較 n = 40 □前期 ■後期

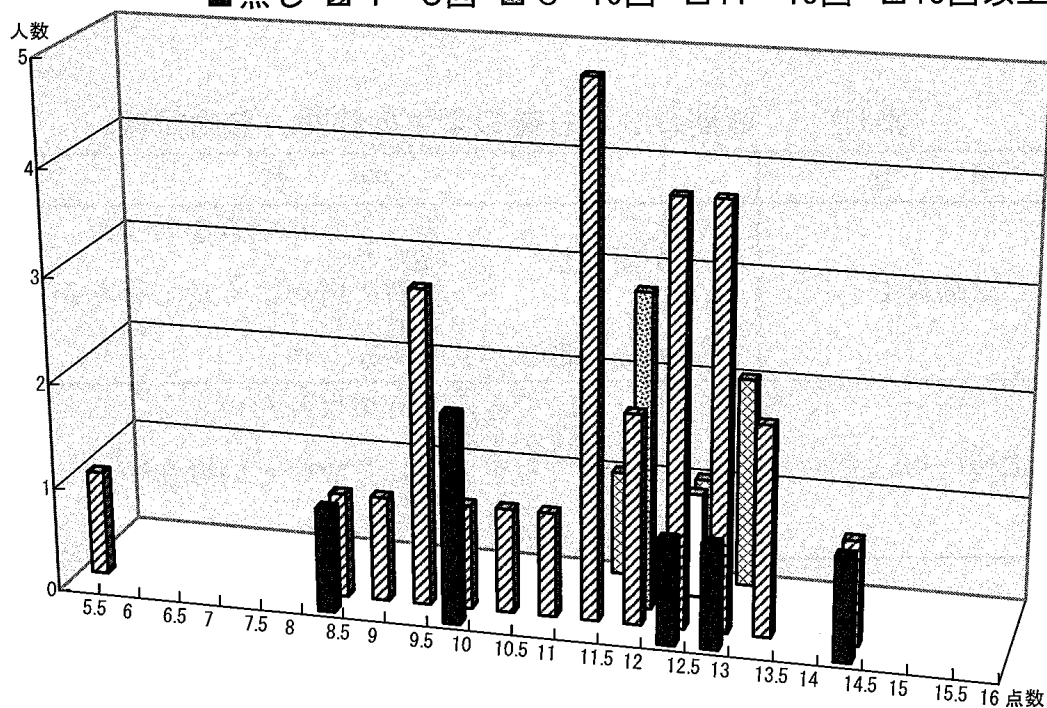


### 3. 練習回数と得点（前期）について（表10）

前期評価後に練習回数を聞いたところ、41名中6名が練習をしないで試験に臨んでいる。しかし、この6名中に最高点14.5点を取っている者がいる。一方、15回以上練習した者の中に12.5点の者がいる。また、1～5回練習をして5.5点の者もある。したがって練習回数と得点は比例しないことがわかる。後期はこの質問を実施していない。

表10 練習回数と得点（前期） n=41

■無し □1～5回 ▨6～10回 □11～15回 ▩15回以上



#### 4. OSCE実施後の学生への自己評価アンケート及び感想

アンケートは「できた」「もう少し」「できなかった」の3項目で尋ねた。感想は自由記載とした。

##### 1) 前期自己評価アンケートと感想 (表11・12)

初めての実技試験であり、緊張して思うようにできなかったようだが、実技習得に前向きな姿勢を感じる。また、利用者への思いやりの気持ちを表現しており、介護者としての自覚が伺える。事後指導を受け、フィードバックをすることで個々の実技の見直しに繋がっている。この反省の気持ちが、アンケート結果に相対的に厳しい自己評価となって表われていると思われる。

表11 前期9実技課題に対する学生の自己評価([できた]が多い順) n=41

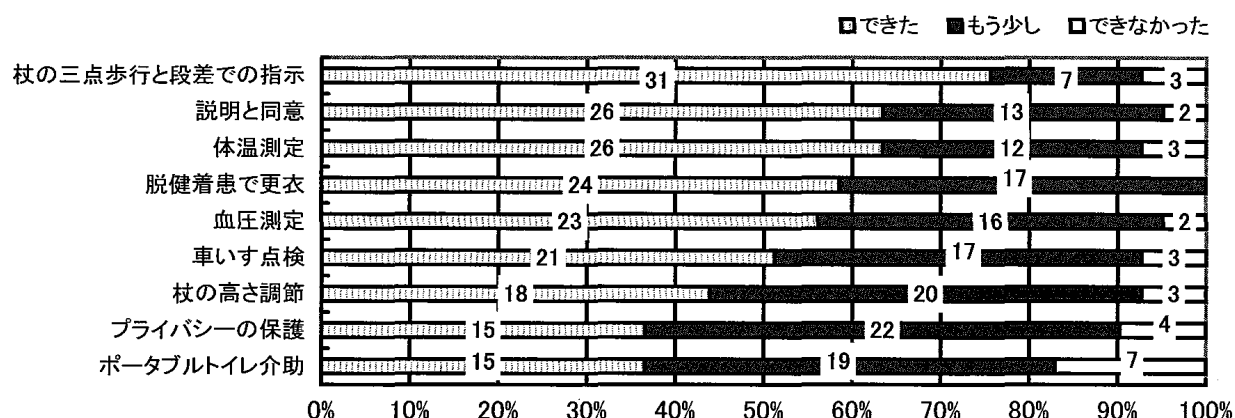


表12 前期OSCE後の学生の感想 (自由記載)

項 目	内 容
試験場で	1 ほとんど全員が緊張して <ul style="list-style-type: none"> <li>・思うようにできなかった。</li> <li>・喋れなかった。</li> <li>・練習の時のようにできなかった。</li> <li>・あせった。</li> </ul> 2 実施後の指導がよく分かった。
実技について	1 スムーズにできるようになりたい。 2 もっと練習が必要。 3 細かいところを大事にしないといけない。 4 自分のレベルを知った。 5 介護の難しさを知った。
利用者にたいして	1 介護者が不安だと、利用者を不安にさせる。 2 利用者の不安を最小限にするため特訓が必要。 3 もっと利用者のことを考えないといけない。 4 利用者のことが分かった。
実習に向けて	1 実習でできるか不安。 2 本番ではミスしないよう気をつける。

## 2) 後期自己評価アンケートと感想（表13・14）

補習時に、介護場面のつながりを重視した方法をとったため、自己評価は高かった。また、実習が近いという認識が強いため、真剣に取り組む姿勢が学生の感想からも伺えた。介護内容が複雑になったが、「排泄の確認」「利用者の了解を得る」などの基本的な声かけは得点が高い。一方で「声かけが不十分」、「技術のことばかりで声かけができなかった」、「言葉遣いが雑になった」などの感想からわかるように、声かけの大切さへの気付きが伺える。

表13 後期20実技課題に対する学生の自己評価（「できた」が多い順） n=41

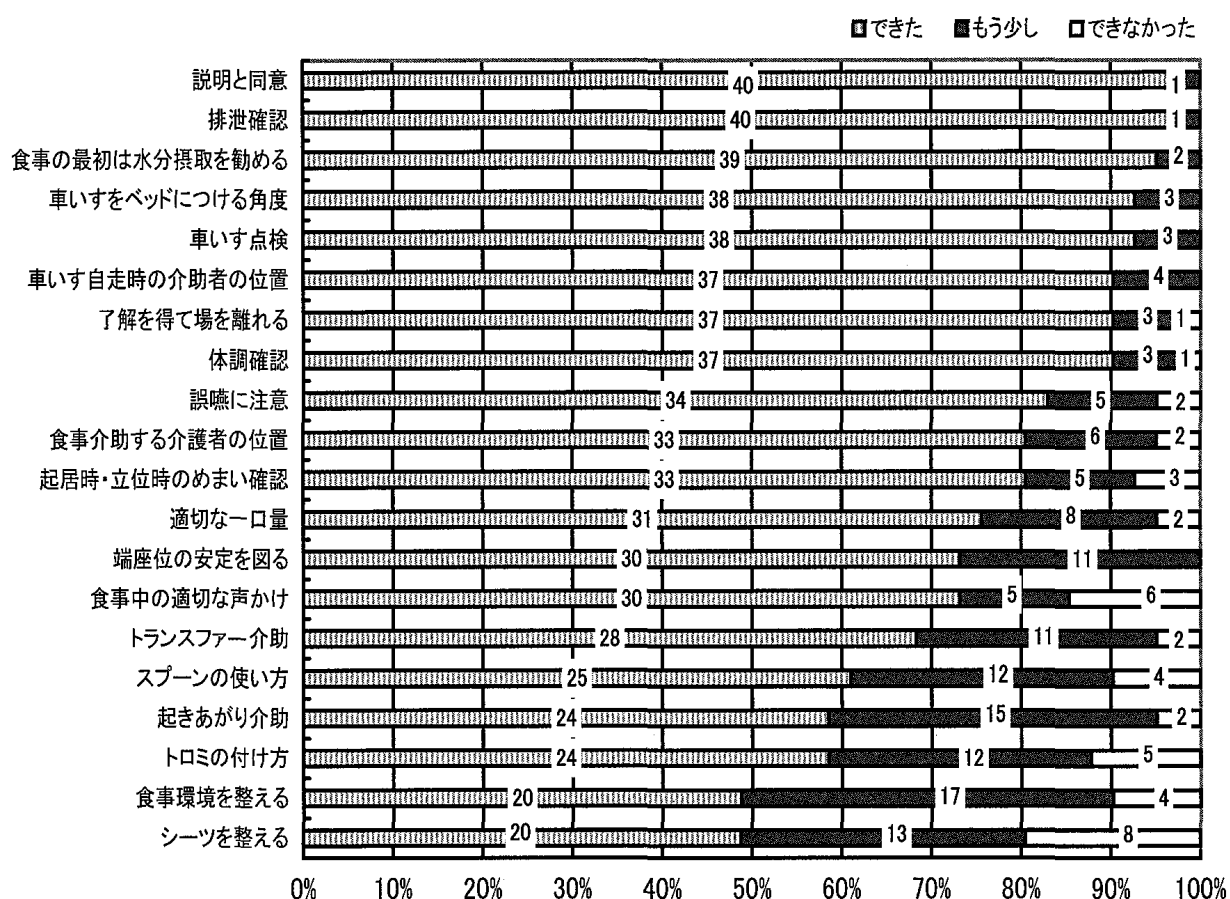


表14 後期OSCE後の学生の感想（自由記載）

項 目	内 容
試験全体について	1、どれだけ覚えて、試験に臨めるかとても緊張した 2、練習のおかげでほとんどのことは身についた 3、前期に比べてスムーズに行えたが、声かけが不十分 4、頭の中で「次はこうしなければ・・・」と技術のことばかりでいっぱい、声掛けができなかった。 5、相手が知っている人なので言葉使いが雑になった 6、練習できていなくて理屈でわかっているミスが多かった 7、ながれのある試験は勉強になる。
実技について	1、全体的にはできたが、細かい部分（技術提供に必死で利用者の様子観察をしていない等）を忘れていることが多かった。 2、前期で学習したことは忘れていることがある。 3、一番不安なところはベッドから車椅子へのトランスファー
利用者に対して	1、ベッドから車椅子へのトランスファー介助は、利用者が怪我をしやすい状況になりやすいので注意を払った。 2、実習で利用者に負担をかけないようにスムーズに動作ができるようになりたい。
実習に向けて	1、実習では学んだ基本的な技術はミスをしないようにしたい。 2、実習前にやっておいてよかった（役に立つ） 3、実習前ということで、緊張を持って、ひとつひとつの動作ができた。

## VI. 考 察

学生の技術習得度向上を目的にOSCEを使った評価を導入した。

OSCEは点数化して順位をつけるという趣旨のものではなく、最も基本的な技能や患者さんへの態度が身についていない学習者をふるい落とすか、あるいはフィードバックして再学習させ、よりよくすることを目的としている。<sup>3)</sup>

OSCEを導入して学生の介護技術習得度が把握できた。今回は臨地実習前であり、第一段階の臨地実習を目標に課題を組み立て、学生の自信に繋がるよう試みた。

### 1) 当学科におけるOSCE導入の展望

今回、学生の技術習得度向上に重点を置き、OSCE形式である1 Station・3課題で運用した。教員の評価に差が生じないように評価基準を作成し評価方法を統一したが、評価の視点が評価者により微妙に違っていた。しか



し、OSCEを導入したことは学生にとって従来にない学びとなり、また教員の今後の教授法を考えるよい機会になった。今後は基本である1 Station・1課題とし、課題の出し方を検討する必要がある。

また、補習授業で毎回実技チェックを教員3人で実施しているが、チェックの仕方に基準がなく20人の学生を相手にし、チェックしてほしいというペアの実技を順に見ている現状の中、見落としがあったと反省するところである。評価点が前・後期共に伸びていない学生がいることから、補習授業のチェック方法を再考しないといけないことが分かった。補習授業時のチェックを3（教員）対20（学生）でなく、OSCEのように各教員が1課題を持ち、3 Stationを学生が順に回りチェックを受けることで、チェック漏れをなくすことができると思う。

一方、介護は人命を相手にする仕事であり、介護技術教育の目標は、学生全員が基準レベルに到達することが求められる。高橋は<sup>4)</sup> 介護の実技教育には積み重ね学習が大切であると述べていることから、実技のレベルアップを図るには、課題をクリアできなかった学生に対しては、次の課題に進ませない方向で取り組むといった、徹底した技術習得体制が必要である。

今後のOSCEの運用として、補習授業時のチェックにも導入を図り、最終評価に展開していきたいと考える。

## 2) データから見る今後のOSCE導入課題

吉川ら<sup>5)</sup>の研究によるとOSCE実施にあたり重要度判定基準というものを作っている。これは対象に身体的・精神的苦痛を与えるもの、学生にとって習得困難なもの等を指している。つまり、学生にとって日常生活ではあまり実施することのない項目である。今回私たちが前期、後期行った演習課題項目で「説明と同意」「体調確認」「体温測定」「食事」については高得点になっている。これは比較的學生にとって日常的な要素の強いものであるためだと考える。一方、「トランスファー」「ポータブルトイレ介助」などに代表される學生にとって、非日常的な要素の強いものに関しては低得点になったと考える。また、學生は実習前ということもあり、利用者をイメージできないこと

も低得点になった原因と考える。

ゆえに、重要度判定基準項目に関しては実技を繰り返すことでレベルアップさせる必要がある。

### 3) 学生の感想を生かした今後のOSCE導入課題

表11,表13から伺えるように,学生は自己評価で「できた」と答えている者が全体的に前期よりも後期の方が伸びている。また,表12,表14からも伺えるように,前期も後期も緊張があったが,前期は漠然としたものであったのに比べ,後期は具体的なものが見られた。このことは,学生の自己洞察が深まり,実習に向けて自信と介護者としての自覚が芽生えてきたと言える。上野ら<sup>6)</sup>は,カリキュラムのあり方に教科型と体験型があり,更に,この2つの型は連動性がなければならないと言っている。体験型カリキュラムにOSCEを導入したことは学生にとって技術を習得するうえで意義のあることだと評価できる。

## VII. 結 論

介護技術はコミュニケーションを土台にはじまり,移動の介護が中心を成し食事・入浴・排泄と広がりを見せるものである。その全てに理論に基づいた確かなものが求められる。決して学生の個性に合わせるといった振幅性のあるものではない。また,私達教員に求められるのは,全ての学生が基準のレベルに到達すべく教授することにある。今回,授業にOSCEを導入することで以下の結論に達した。

- 1,学生に技術には積み重ねが必要だという動機付けができる。
- 2,学生に技術には連動性があることを認識させることができる。
- 3,学生にフィードバックさせ,さらに技術の習得度を振り返る機会を与えることができる。
- 4,ある一定の学生に個人指導の必要性を明らかにすることができる。
- 5,指導に当たるに際して統一性をもたせることができる。
- 6,補習授業のあり方を検討する機会になる。

### 引用文献

- 1) 竹尾恵子：臨床重視型の教育に向けて何をすべきか 看護展望 31-2  
p6 メヂカルフレンド社 2005
- 2) 伴信太郎：客観的臨床能力試験（OSCE） 医学教育 36-2 付録 p133  
2005
- 3) 松岡健：『連載第1回OSCEなんてこわくない』 週刊医学界新聞  
(2371号 2000)
- 4) 高橋フミエ：介護福祉学に問題基盤型学習（PBL）を導入して  
—在宅介護技術の実技チェックにおけるつみ重ねの意義—  
静岡福祉大学紀要 P66～67 2005
- 5) 吉川奈緒美・皆田良子：看護教育の新しい試みを探る  
—OSCEによる看護技術評価の実際とその効果—  
看護教員と実習指導者 1-2 P40 日総研 2004
- 6) 上野恭裕・藤田博子：現在教育学 p139 三晃書房 1999

### 参考文献

- 1) 皆田良子・吉川奈緒美：看護技術教育へのOSCEの導入 第二報  
—介護技術内容の焦点化に基づく運用方法の検討—  
日本看護教育学会誌 2003
- 2) 吉川奈緒美・皆田良子：看護技術へのOSCE導入 第3報  
—OSCEで実施する看護技術内容の判定基準の検討—  
第34回介護教育学会 2003